御堂筋のコモニング
～御堂筋チャレンジからアフター万博へ～

株式会社地域計画建築研究所（アルパック）代表取締役社長／（一社）ミナミ御堂筋の会エリアマネージャー　中塚　一

■大阪のメインストリート

第７代大阪市長の関一が計画した大阪の２大ターミナル・梅田からなんばまでを南北に貫く全長4.4km、幅員44ｍの御堂筋。2012（平成24）年４月から、指定区間外の国道として大阪市が再び管理することとなり、2017（平成29）年には建設から80周年を迎えた。大阪は、上町台地の大阪城から西に向いた東西の道「通り」に沿って、特徴ある生業、都市機能が集積したため、南北の道「筋」である御堂筋沿道は、北と南では全く性格の違う装いを見せている。私達の会が位置する御堂筋の南側は、古くは江戸時代に芝居小屋や興行、飲食店などが集積した大阪を代表する繁華街・盛り場である。

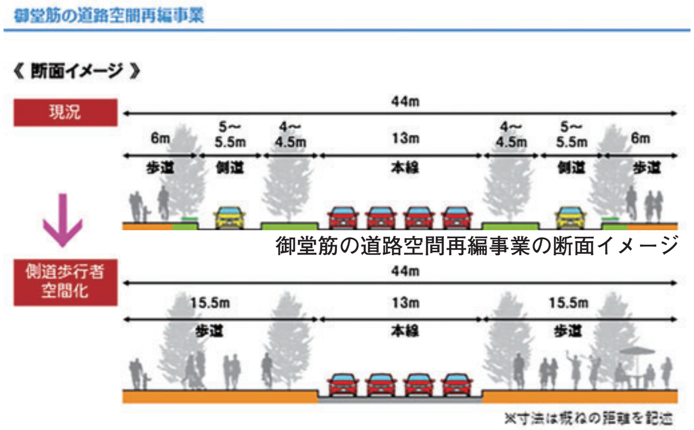
■ミナミ御堂筋の会の設立

2015（平成27）年の新橋交差点からなんば広場間の御堂筋イルミネーション南進化を機に、沿道企業を中心に「ミナミ御堂筋の会」は設立された。当時は、インバウンドの波がミナミにも押し寄せてきており、ホテルやラグジュアリーブランドの巨艦店の立地、老舗百貨店の建替えなどの民間開発が進行していた。一方で道路空間は、1970年の大阪万博の頃に一方通行化した当時から比べると、自動車交通量は約４～５割減少し、逆に歩行者交通量は約３倍、自転車交通量は約６～７倍と大きく増加し、特に歩行者と自転車との輻輳による事故が地域の大きな課題となっていた。そのため地域では、道路空間の再配分と沿道の民間開発が一体となって、新しいまちづくりをめざしていこうという機運が醸成されつつあった。

ミナミ御堂筋の会では、会の目的（ミッション）として、国内のみならず海外からも注目される“世界の御堂筋”をめざし、まちの資産価値向上を図るべく、不動産オーナーが連携し、①高質なメインストリートの空間・環境づくり、②経済・投資活動でまちが潤うしかけづくり、③まちの発展を導くマネジメント体制・しかけづくり、を掲げて活動を開始した。先ずは毎月の定例会議（世界の沿道事例の勉強会、沿道まちづくりや不動産情報の共有等）と会議後の清掃・不法駐輪啓発活動（エフ札張り）などの身近な活動からスタートした。特に地域の大きな課題である放置駐輪問題に対しては、バナー等の広告媒体を活用した広告協賛を、ホームレス支援をされている認定NPO法人Homedoorと連携し、啓発指導活動に費用充当する事業スキームを構築し、具体的な対策を展開した。なお御堂筋全体では、北から「御堂筋まちづくりネットワーク」「御堂筋・長堀21世紀の会」「ミナミ御堂筋の会」が組織化され、それぞれの地域の特徴に応じた多種多彩な活動が実践されている。

■御堂筋の道路空間再編

2019年に大阪市において「世界最新モデルとなり、人中心のストリートへ」をめざした「御堂筋将来ビジョン」が策定された。「車重視の道路空間から人重視の道路空間へ」との基本整備方針が掲げられ、御堂筋完成100周年の2037年をターゲットイヤーとして「人中心～フルモール化」への空間再編をめざすことが示された。現在ファーストステップとして側道歩行者空間化が、町会・商店会、沿道地権者団体、関係団体を中心とした沿道協議会での数十回にも及ぶ協議を踏まえ、産官学民連携で進められている。私達は、ビジョンは将来のめざす方向性を示したものであり、整備イメージは確定したものではなく、今後の自動運転等の技術の進歩や社会経済情勢の変化にアジャイルすることにより、常に変化・進化していくものと考えている。



御堂筋の道路空間再編事業の断面イメージ

御堂筋の道路空間再編の断面イメージ

■御堂筋チャレンジ2017～2023

大都市の大動脈であるメインストリートの歩行者空間化は、世界でも類を見ない事業であるため、度重なる社会実験を行い、そのデータを分析しながらハード・ソフトの実装にチャレンジしている。

第１回（2017年）：モデル区間整備・御堂筋完成80周年をきっかけに、将来の魅力ある滞在空間を可視化

第２回（2018年）：歩行者利便増進道路指定を念頭に、区域指定・整備の検証と道路協力団体による継続利活用を実験

第３回（2021年）：道路協力団体による利活用拡大と周辺・なんば駅前広場とも連携した歩行者回遊データの検証

第４～５回（2022～2023年）：さらなる拡張、道路協力団体による利活用拡大と維持管理スキーム検証、万博への機運醸成

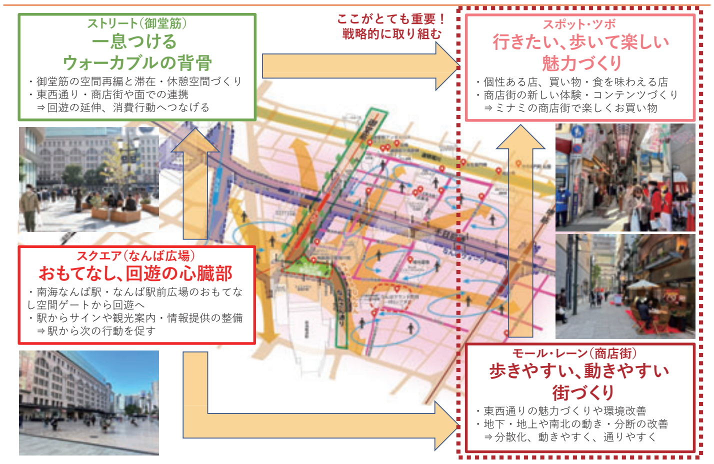
御堂筋チャレンジ2023でのベンチの社会実験

■ミナミエリアの回遊性創出に向けて

私達は、社会実験を重ねるごとに、「長く過ごす（滞在）」ことが「歩きまわる（回遊）」を誘発し「売上が伸びる（購買）」につながるのではないかとの考えに至った。仮説を実証するため産（商店街、鉄道事業者等）、官（大阪市、大阪観光局）、学（大阪公立大学、京都大学、東京大学）、民（エリア団体等）の関係者で研究会を組織化した。

2021年は歩行者の携帯電話の位置情報やAIカメラ等による人流データによる回遊状況の把握と見える化（どこに来訪しているのか、どこからどこに行っているのか）、2022年はICT技術によるデータ取得に加え空間調査・解析やベンチ等設置による来訪者や滞在時間（前年度比約15～25％増）、移動距離・範囲（約165ｍから約228ｍに延長）、来店者・売上（平均約３割増加）を分析。2023年は地域情報案内板やスマートフォンを活用した回遊促進の試行等を行った。現在、広場やベンチ等の滞在空間整備や東西道路との連携は、エリアの回遊を促す上で効果があり、来街者の購買行動も促進することがデータで分かってきた。さらに御堂筋という「線」だけでなく、東西道路も含めた「面」での人中心の歩きたくなるまちづくり（ウォーカブル）へと関係者の議論・連携が発展して来ている。

ミナミのウォーカブル・将来イメージ



ミナミの面的な回遊イメージ

■ミナミのカルチャーを創造し、世界に発信するストリート

現在、2025年大阪・関西万博に向けて、特に将来ビジョンで示された「新たな魅力が体験できる御堂筋」をどのように実証していくのかの議論・協議が活発にスタートしている。ミナミ御堂筋の会では、街路空間の創造的活用と魅力コンテンツの創造・発信による「エリア価値の向上」を合言葉に、単なるイベントに終始しないようアフター万博を見据えて、体制、財源、デザイン、ルールを総合的にバージョンアップしていく未来社会の実験場と捉え、以下の事業を企画している。

①道路活用の常設化：ポップアップストア、アメリカ村等との連携
②世界とつながるストリート・ハック：気候変動対策、世界カーフリーデー、ウェルネス、アーバン・スポーツとの連携
③ストリート・カルチャーの発信：アート拠点連携、若手アーティスト支援（バスキングシステムの構築）

■街のコモニング*

これまで私達は、経済成長と共に都市空間や建築を、経済性、合理性、管理のしやすさ、責任の明確化などから、官民の境界を明確に分離してきた。そしてその結果、私達の暮らしや都市は豊かになったのか？と今、問い直している。

道路空間を地域団体で利活用して管理しようという御堂筋等での歩行者利便増進道路（ほこみち）等の取組み、セットバックや公開空地の民地空間を地域に開放しようとする取組み等は、忘れ去られてきた「コモンズ」を街に取り戻さないと、日々の暮らしが豊かにならないし、人と人との出会いからしか新しいアイデアや小さな営み、さらに創造都市や地域文化は生まれない事に私達は気づき始めた。「人中心のまちづくり」と大上段に構えるだけでなく、「15分生活圏に小さなコモンを取り戻していく市民活動」の積み重ねが、人と街を繋ぐスペースをプレイスに変えていく原点である。

コモンズは、社会的共有資本であり「社会的・経済的・法制的な諸条件のもとで、持続可能なかたちで管理、維持するための制度、組織」と言われている。そのためには「みんなが、いつでも、いつまでも使える」ための気配り（一定の配慮）が必要であり、また市場の論理や貨幣だけではない価値観や論理で動く「場」であると考える。大切なのは「みんな」は「私たち」であり、そのために、私たち一人が第一歩を踏み出す必要がある事。また「コモンとは自治のことである」とも言われており、先ずは身近なご近所、地域、生活圏、街から、ややこしくて面倒で手間と時間がかかる「自主管理」という古くて新しいテーマに、今後も私達は泥臭くチャレンジしていきたいと考えている。

＊コモニング：コモン＝共有の資源をつくり、維持し、享受していくプロセス

なかつか・はじめ
1961年京都府生まれ、滋賀県育ち
1988年アルパック入所
技術士（都市及び地方計画）、一級建築士、認定都市プランナー、大阪公立大学大学院工学研究科非常勤講師など
2018年日本都市計画学会関西まちづくり賞
2022年グッドデザイン賞・大阪市ハウジングデザイン賞など